

フッサール・セレクション

立松弘孝編 (平凡社 2009)

まえがき

- 7 現象学自身は単なる方法論に尽きるものではなく、哲学の理論として独自の主張をもつものである。而して、現象学的哲学にとってもっとも根本的な問題は、意識と存在と自我の問題であろう。

思想と生涯

1. フッサールの生涯

- 19 April 8, 1859, Prostějov, Moravia, Austrian Empire—April 26, 1938, Freiburg, Germany.
ライプチヒ大学でのあだ名は sleepyhead であった。78年4月数学専攻を決意しベルリンへ転学 (Weierstrass, Kronecker, Kummer)。81年3月ウィーン大学に移り Königsberger のもとで博士論文「変分法論考」(83年1月)。83年夏学期 Weierstrass の助手としてベルリンへ移るがその冬 Weierstrass が病に倒れたので84年夏学期はウィーンに戻る。ブレンターノのもとで哲学。
- 22 ブレンターノの講義を聴くに及んで初めて「哲学もまた真摯な研究に値する領域であり、もっとも厳密な学問の精神によって取り扱われるうるしまた当然そのように取り扱われねばならないのだという確信」を得たのであり、そしてこの確信によって『哲学を生涯の天職に選ぶ勇気を与えられた』のである(「ブレンターノの思い出」)。
- 23 ブレンターノの志向性の概念は静的。フッサールは志向性をダイナミックな機能概念、すなわち〈志向される対象にその存在の意味を付与する超越論的意識の構成的能作〉と解する。大きな隔たりがある。ブレンターノはドイツ観念論の酷しい批判者であり、むしろイギリスの経験論哲学と心理学主義の哲学を高く評価していた。フッサールはその感化を受け、カントを評価するようになったのはずっと後年のことである。
- 24 1886年10月ハレ大学にうつり(これから14年間私講師)その翌年「数の概念について—心理学的分析」で大学教官資格審査に合格、87年10月「形而上学の目標と課題」で私講師就任の公開講演。86年にユダヤ教を離れルター派に改宗。
- 26 カントールと親しくなったのはハレ時代(?)。当時のフッサールの関心は数論ないし算術と論理学の問題に集中し、しかもそれらの問題を心理学的方法に依拠して解明しようとしていた。
- 27 こうして次第に論理学の基礎に関心に移り、論理学は認識論と並んで学問論の根幹をなすものであるから、彼の関心はいっそう普遍的な学問一般の問題領域へ拡大されてゆくことになる。
- このような拡大された問題意識のもとに、しかもこれまでの心理学主義の立場¹に対する徹底的な自己批判を通り抜けた上で、彼自身の現象学を唱道した最初の記念すべき著作こそ「論理学研究」である²。
- 1901年夏ゲッチンゲン助教授。
- 28 ゲッチンゲン時代15年は外的には多くのよき理解者と将来を嘱望できる弟子たちを得たもっとも幸せな時代であったと思われる。しかし、このような恵まれた人間関係を持ち得たということと、彼自身の精神的苦闘とは別である。

¹ 演繹科学の論理は心理学によって説明され基礎づけられ得るという立場。

² vol.1 「純粹論理学序説」(1900); vol.2 「現象学と認識論のための諸研究」(1901)。

「仮に自分を哲学者と呼びうるとした場合に、私が自分自身のために是非とも解決せねばならない普遍的な課題をまず第一にあげるならば、それは理性の批判である、論理的理性と実践的理性、および価値判断理性一般の批判である。

29 フッサール文庫に保管されている遺稿も含めて言えば、ゲッチンゲンの15年間も非常に多産な時代であるが、しかしフッサールは「出版にいつも一種の恐れを抱いていた」(インガルデンの表現)ため、実際に公刊された著述は意外にも少ない。

32 インガルデン宛の最後の短い手紙(1937/7/23)は「この数年、小生は滅茶滅茶に(zu toll)働きすぎた」という言葉で終わっている。哲学者の死亡通知に印刷された「彼の生と死は静かな英雄的生涯 stille Herdentum であった」という言葉は、フッサールの生涯にまことにふさわしいものと言うべきであろう。

34 彼は、もしも事象自身が(理論が教えるものとは)別の相貌を呈するならば、これまでに獲得したいっさいの認識と、いっさいの定理(Theoreme)をいつでも破棄する用意があった」(Fink)

2. フッサールの思想

36 「数とは幾つかの一からなる多である」という定義が真に説明的な意味をもつためには、多と一概念が明確に規定されねばならない。しかるに多概念は「任意の個々の諸対象の総体」という具体的現象を基盤にして成り立つものである。そしてその総体が成立するためには、確かにその成員となる個々の諸対象も必要ではあるが、しかしそれ以上に必要不可欠なものは、個々の諸要素を一つの全体へ結合する「集合的結合」の関係である(H XII 20&301)。しかもこの関係は、物理的関係(すなわち同等性や相似性のような、内容的関係)ではなく、心的関係である。心的関係である以上、集合的結合は、たとえば相似性のような表象内容それ自身のうちに直接与えられているのではなく、むしろ結合される表象内容そのものにとっては外的な、しかもそれらを統一し総括する心的作用のうちにのみ存立しうるものであり、従ってまた心的作用の自己反省によってのみ、その存在が確認されうるものである(ibid 73f&333)。

37 多概念は結合される諸対象を〈something〉として総括する表象である。Somethingと呼ばれうるものの唯一の共通性は、それらが「われわれの意識の中の何らかの表象内容」であるということ、もしくは「それらの表象内容によって代表されているもの」であるということだけである? 従って、〈something〉という概念もまた、心的な表象作用を反省することによってのみ成立する概念である(ibid 80&336)。

38 集合と基数を根源的に産出する、集める作用と数える作用の自発的行為へと立ち返ることによって、集合論と基数論の基本的な諸概念の、本来的な、しかも根源的に真なる意味についての明晰性を得ようとする最初の試みであった。

39 このような解釈をすれば具体的な現象も語義も基数も、あらゆるものが心的表象に還元される結果になり、表象と概念の、換言すれば主観的なものと客観的なものとの、相違と境界が不当に消滅してしまうことになる、というのがフレーゲの批判の要点である。

フレーゲは既に 1884 年刊の『算術学の基礎』においても「心理学的なもの論理的なもの、主観的なものと客観的なものとを明確に区別する必要性」を強調していた。

ナトルプ「学問的認識一般の真理，すなわちその客観的妥当性は「純粹に客観的に基礎づけられねばならない」として、「認識の主観的基礎付けに対する客観的基礎付けの独立性と優位」を強調している。フッサールはこの二人のや反心理学主義的思想や、「表象自体³，命題自体，真理自体」の客観的な独自存在を主張した B. Bolzano の思想を知ることによって、彼自身が新たに開拓すべき道を示唆されたのである。

40 こうしてフッサール自身「数学およびあらゆる学問一般の客観性が、論理的なものの心理学的基礎づけと一体どのように整合するのか」という原理的な疑問に逢着して、「論理学の本質についての、特に認識作用の主観性と認識内容の客観性との相互関係についての一般的な批判的反省」へと駆り立てられたのである (cf p89)。

41 フッサール自身の現象学は、いわゆる客観主義をそれ自身のうちに包摂するような現象学的主観主義，超越論的主観主義へと発展してゆくことになる。

42 イデア的見方の斬新さは〈数える作用〉と〈数そのもの〉との異質性を確認し、それを重視する点である。数それ自体，和それ自体は、心的作用そのものでも、特定の個人の心的表象でもなくまさにイデア的な純粹概念であり、これらについてのリアルな心的作用や心的表象とはまったく異質のものである事が強調されている (cf. LU I, 170ff)。なぜなら、数えたり加算したりする心的作用が瞬時に生成消滅するのに対し、数と和それ自体は不変的に妥当し、恒存しているからである。ともかくこのようにイデア的なものとリアルなものとの異質性を確認すると共に、イデア的なもの (= 本質) の自体的存在を強調するのが、この形相的見方の特徴である。

43 心理学主義はイデア的なものをそれとは異質のリアルな心的作用によって基礎付けようとする点で、根本的誤謬，metabasis として厳しく指弾されることになる。

44 問題解決の方法は自己批判され棄却されたのであるが、基本的問題意識そのものは否定されることなく残留し、「超越論的」という見方のもとに浮上するのである。この術語はカントの用語の借用である。1890 年代後半から彼はカントを見直した。

45 フッサールの現象学にとって最も重要な志向性と構成の両概念は、〈構成的能作としての志向性〉という表現が用いられていることから明らかなように、とりわけ後期のフッサール哲学においては、有機的に一体をなす概念である。

48 現象学の課題:

(1) 自我の意識体験の本質構造と機能を解明することによって、学問の成立条件と有意義性を問い質すこと

(2) 自我の意識生活との相関関係の中で、あらゆる対象的存在者とその世界の存在の意味を闡明すること

(3) 他我をも含む世界との相関関係の中で、認識し行動する主体としての自我の在り方を究明すること。

³この表象は「意味」と同義である。

I. 哲学および学問の性格

52 フッサールは、自然主義と歴史主義的懐疑主義的相対主義を厳しく退け、イデア主義 (= 観念論) と理性主義 (= 合理主義) の哲学を宣揚する。

54 「逆説的ではあるが、しかし深い意味をこめて、哲学とは平凡な事柄についての学問とさえ言えるほどである。最初にはなほだ平凡に思われる事柄が、さらに綿密に考察してみると、根底に伏在する様々な諸問題の源泉となるのである。」(LU II/1, 342)⁴。

1. 哲学とは何か

57 われわれはいかなる場合にも徹底的な無前提性 (の要求) を放棄すべきではなく、たとえば絶対的に明確な《諸事象 (Sachen)》と経験的諸事象とを同一視してはならない。すなわち非常に広範囲に直接的な直観のうちに与えられている諸理念を観取する眼を失ってはならない (『厳密学』I. 340f.)⁵

58 私がいまここで (学問と非学問とを識別する) 基準にしているのは、たとえ小さな断片にもせよ客観的に基礎づけられた理論的な教授内容をもっているかどうかという点である (『厳密学』I. 290)。

60 如何にヘーゲルが彼の方法と学説の絶対的妥当性を主張しようと、彼の体系には哲学の学問的性格を初めて可能ならしめる理性的批判が欠如している (『厳密学』I. 291f.)。

哲学にとってはどのような独断の先行も許されず、どのような種類の余談的確信を持つことも許されない (『第一哲学』H VII 190f)。

64 科学がその諸問題を体系的に解決するための諸理論を構築するのにたいして、哲学者は理論の本質は何か、理論一般を可能にするものは何か、などを問うのである (『論研』LU I 253f.)。

2. 学問とは何か

II. 現象学の課題と性格

84 フッサールの研究テーマは、算術の論理から始まって、形式論理学一般の諸問題へ、そしてさらに論理的諸概念および諸法則の起源を解明すべく、認識批判学的諸問題へと発展していった、しかし単にそれだけのことであれば、取り立てて現象学の独創性と言える程のことではない。現象学の独創性は、上記の一連の諸問題を究明する、その独特なアプローチの仕方にある。すなわちそのひとつは心理学主義を排して、純粹に形相的な見方を確立したことであり、そしてもう一つは意識の〈志向性〉をあらゆる考察の根底に据えて主観的なものと客観的なものの本質を、つねにその相関関係の中で解明しようとしたことである。フッサールによれば、論理学の領域においても「《真に、または現実に存在する》ということと《理性的に証示可能である》ということとは原理的に相関関係にある」(H III 333) ののである。

認識論的研究と存在論的研究とは、たしかにしばしばあい対立するものであるかのように

⁴LU = Logische Untersuchungen I = 第一版, II/1 第二版第一分冊 (1913)

⁵Philosophie als strenge Wissenschaft. Logos Bd I p289-341 (1911)

理解されている。しかしフッサールにとって認識論とは「意識と存在の關係の諸問題を究明する」(L 300)のものであり、従って認識論的研究と存在論的研究との區別は、単に便宜的、相對的區別であるにすぎない。しかも一般に、本質的相關關係は単に意識と意識される對象的存在の間にのみあるのではない。たとえば「存在するものはすべて《それ自体》認識可能であり、そしてその存在は、ある特定の《真理自体》のうちに明示される、内容的に規定された存在である」(LU II/1, 90)から、従って《存在自体》には《真理自体》が、そしてさらに後者には明確で一義的な《言表自体》がそれぞれ対応しているのである。だからこそ「真の存在という理念と、真理、理性、意識、という諸理念とを結合する、本質的な相關關係を普遍的に解明すること」(H III 349)が、現象学全体の總括的な課題となるのである。

1. 現象学の成立

- 89 数学的諸表象の起源の問題であるとか、実践的方法の實際に心理学的に規定された形式などが問題になった場合には、私には心理学的分析の成果は明晰で示唆に富むものに思われた。しかし思考作用の心理学的諸関連から思考内容の論理的統一性(理論の統一性)へ移った途端に、正当な連続性はもはやどうにも見出されなくなった。そのため〈数学およびあらゆる学問一般の客観性が論理的ものの心理学的基礎づけとどのように整合するか〉という原理的疑惑さえもがますます私を不安にした。こうして、当時の支配的な論理学の種々の確信に支えられていた私の方法—すなわち、与えられた学問を心理学的分析によって論理的に解明するという方法—がすっかり動揺してしまったため、私は論理学の本質についての、特に認識作用の主観性と認識内容の客観性との相互作用についての一般的な批判的反省へとますます駆り立てられるのを覚えた。私は論理学にたいして提起せざるをえなかった特定の諸問題に関する解明を論理学に期待するたびに、常にその[心理学主義的]論理学に裏切られたので、ついに私は、認識論の基本的諸問題や学問としての論理学の批判的理解において確実な明晰性に到達できるまでは、私の哲学的・数学的諸研究をまったく差し控えることを余儀なくされたのである(『論研』LU I p vi f)。
- 90 学としての純粹現象学が純粹であり、自然についての實在措定を利用しない以上、このような現象学は本質研究でしかありえず、決して現存在(Dasein)の研究ではありえない。あらゆる《自己観察》とそのような《経験》に基づくいっさいの判断は、現象学の領域には含まれない(『厳密学』I 318)。
- 93 現象 Phänomen という言葉はとりわけ直感的表象の作用と関係している。—中略—次のようなものが現出(=現象)と呼ばれている。
- (1) 直観の具体的体験(知覚する場合の具体的体験)
 - (2) 直観された(現出している)対象、しかもいまここに現出している対象。
 - (3) (1)の意味での現出の实的成素そのもの
- (対象を)現表象する(presentieren)する感覚とこれらの感覚の契機に対応する対象自身の諸性質が区別されていない。しかし、対象自身の諸性質は、体験されたそれらの諸契機を《解釈する》作用によって現出する性質である。
- 94 現象のものそのものは自然でないとするれば、現象は直接的な直観作用によって把握されうる本質を、しかも十全的に把握されうる本質を所有している。直接的な諸概念によって現象を記述する諸言表が妥当な言表である以上、それらの言表はすべて、本質概念によって、すな

わち本質直観により当然充実されるはずの概念的な語義によって、現象を記述するのである（『厳密学』L 314）。

95 心的体験そのものは反省によって初めて開示されるのであり、反省によってわれわれが把握するのは、事象そのものや、価値、目的、有用性そのものではなく、それらに対応する主観的諸体験であり、それらはこれらの諸体験の中でわれわれに《意識》され、最も広い意味でわれわれに《現出する》のである。それゆえに主観的諸体験もまた《現象》とよばれる...（『百科草稿』H (X 279)）。

2. 現象学の学問論的研究

99 客観的な論理学、すなわち自然的態度の実証性を備えた論理学は、われわれにとって第一の論理学ではあるが、しかし究極的な論理学ではない。究極的な論理学は、理論としての客観的論理学のすべての原理を、その根源的かつ正当な超越論的-現象学的意味へ遡源させることによって、客観的論理学に真の学問性を付与するのである（『論理学』FTL 239）⁶。

105 認識論は、形而上学に従ったり、いわんやそれと一致したりするような学科と解されるべきではなく、心理学およびその他すべての諸学科に先行するのと同様、形而上学にも先行する学科と解されるべきである（『論研』LU I 224）。

108 真の認識とは、単なる直観のことではなく、範疇的に形式化されることによって完全に思考に適合するような十全的直観のことであり、逆に言えば直観から明証性を汲みとるような思考のことである（『論研』LU II/1 168）。

3. 現象学の主要課題

113 思考体験および認識体験の純粹現象学は、これをも包摂する体験一般の純粹現象学と同様、直観により把握され分析されうる諸体験のみを純粹に本質普遍的に研究するのである。従ってリアルな事実としての諸体験を、すなわち〈経験の事実として措定されている現出する世界のなかで、様々な体験をする人間や動物の体験〉としての〈経験的に統覚される諸体験〉を研究するのではない（『論研』LU II/1 2 f）。

115 純粹現象学は、物理的並びに心的な自然的諸現実についての真理（すなわち歴史的な意味での心理学的真理）はいっさい論定せず、またそのような真理を前提や補助定理として用いることもしない？むしろ純粹現象学は、純粹に内在的な十全的直観の所与（すなわち純粹体験の流れ）を越えて思念する統覚や判断措定をも、それら自身も体験であるがゆえに、純粹に体験としてのみ取り扱い、そしてこれらの諸体験についての、純粹に内在的な純粹に《記述的な》本質研究を行うのである（『論研』LU II/2 235 f）。

118 対象が存在するということ、しかもそれが存在するものであり、これこれしかじかのものであることが認識によって証示されるということは、いったいどういうことかという問題は、純粹に意識そのものの側から明証的に、余すところなく理解されねばならない（『厳密学』L 301）。

⁶Formale und Transzendente Logik Jahrbuch Bd X p298 (1929)

III. 現象学の方法

- 153 「いっさいの理論を去って、事象そのものへ」
われわれはいっさいの先入見を捨て去った後に、われわれが立ち帰るべき事象とは何か、ということ深く考えてみなければならない。
- フッサールの著述には、〈見る〉に関連した用語が非常に多く、優に三十種を越す程であり、それらを一つ一つ日本語で訳し分けるのは不可能である。たとえば洞察 Einsicht, 明証 Evidenz, ノエマ, ノエシスなども、もともと〈見る〉を意味する言葉からの派生語である。
1. 記述と分析
- 155 現象学は客観化的科学を支配する諸原理たる根本概念や根本命題を解明するのであるから、客観化的科学が始まるところで現象学は終結するのである？ 従って現象学は(客観化的科学とは)まったく違った意味での学問であり、まったく別の課題と方法を持つ学問である(『理念』H II 58f)。
- 157 真の方法は究明されるべき事象の本性に従うものであって、われわれ自身の予断や範例に従うものではない(『厳密学』L 309)。
- 妥当な思考単位としての論理的諸概念は直観のうちにそれぞれの起源を持たねばならない(『論研』LU II/1, 5f)。
- 159 経験ないし直観のみがわれわれの言葉に意味と理性的権利を与えらるのである(『厳密学』L 305)。
経験論者の論証の原理的な誤謬は、《事象そのものへ立ち帰れ》という基本的要求を〈すべての認識を経験によって基礎づけよ〉という要求を同一視し混同している点にある。認識可能な《諸事象》の範囲を明らかに自然主義的に制限しているがために、経験論者にとっては普通の意味での経験がそのまま直ちに〈事象そのものを与える唯一の作用〉と見做されるのである。しかし事象と自然的現象とは無条件に直ちに同定できるものではない。普通の意味での現実がそのまま直ちに現実一般であるというわけではなく、近代科学が通常〈経験〉と呼んでいる、(対象を)本原的に与える作用は、ただ単に自然的現実と関係するだけである(『イデー』H III 43)。
- 161 事象が体験に内在するというのも、たとえばケースや容器の中に入っているというような在り方ではなく、体験の内部に決して実的に見出されない事象が体験の内部で構成されるということである。—中略—事象は独自に現存しているのではなく、また〈意識の中へ自己の表象を送り込む〉のでもない(『理念』H II 11f)。
2. 真理と明証
- 172 真なるものは絶対的であり、《それ自体に》真である。真理は、これを判断によって把握するものが人間であれ人間以外のものであれ、天使であれ神々であれ、同一である(『論研』LU I, 117f)。
[C] これはフッサールとも思えない先入見である □

175 客観的真理とは、もっぱら自然的-人間的な世界生活 *Weltleben* の見方に属するものであり、根源的には人間の実践の必要から、存在するものとして端的に与えられているもの(すなわち恒存するものとして先取され、そしてその存在を確信されている対象極)に保証を与え、その所与性に対する確信が変動するのを防止しようとする意図のもとに生じるものである(『危機』H VI 179)⁷。

179 (デカルトの)道にとっては〈私が絶対に否定しえないもの、絶対に疑いえないものは、私にとって当然妥当性を持つべきである〉ということが、最初にそこで提示された〈絶対的正当化〉の指導原理であった(『第一哲学』H VIII 125f)。

3. 本質直観

197 イデア学と実在(real)学との間には、全く橋渡しの不可能な本質的な違いがある。前者はアプリアリ的であり、後者は経験的である。イデア学が〈真に普遍的な諸概念に基づいていることが洞察的に確認されるイデア法則的な普遍的事項〉を開陳するのに対して、後者の実在学は事実の領域に関する実在法則的な普遍的事項を、しかも蓋然的な洞察によって論定するのである(『論研』LU I, 178)。

202 (経験科学者)にとっては経験が基礎づけの作用であり、この作用は決して単なる認識によって代用されるものではない? だからこそ事実学と経験科学は等価値概念なのである。しかし幾何学者が究明するものは現実ではなく、〈イデア的〉可能性であり、現実関係ではなく本質関係であるから、彼にとっては経験に代わって本質観取が究極的な基礎づけの作用なのである(『イデー』H III 21)。

204 最も厳密な意味での事実学、すなわち真に合理的な自然科学は、その基礎額となった自然についての純粋数学が独立の学問として完成されたことによって、初めて可能になったのである。ちょうどそれと同じようにあらゆる場合に、純粋可能性の学は事実的現実性の学に先行せねばならず、前者は後者の具体的な論理学としての役割り(Leistung)を果たさねばならない(『後記』H V 143)⁸。

207 本質に〈対応する〉個体を志向して、類例的な意識を形成する自由な可能性がなければ、本質直観が不可能なことは確かであり—そしてその逆に、理念化を行なうことによって、眼に見える個体のうちに例示されている本質を視向する自由な可能性がなければ、個体的直観も不可能である(『イデー』H III 15f)。

209 本質研究者は本質真理を探究するのであるから、経験を必要としない? 経験は彼が求める真理を何一つ基礎づけてくれないからである。—中略—現象学者は、現存在に対してはほとんど関心を持っていないにもかかわらず、可能な限り、明晰性の源泉である完全に生き生きとした〈印象〉から(本質観取の手がかりを)汲みとるのである(『イデー』H V 52)。

4. 現象学的還元

⁷本書では、とりわけ実証科学の登場以来、超越論的主観主義と物理学的客観主義との離反という形で顕現してきた、哲学と科学の相互疎外が、いかなる理由によって生じ、そしてまたこの両者の断絶が、いかなる意味で人間性の危機を招来しつつあるか、という問題が論じられている。

⁸*Nachwort zu meinen "Ideen usw."* Jahrbuch Bd XI p549-570 (1930).

213 すべての反省は本質的に見方の変更 (Einstellungsänderungen) から生じるものであり...(『イデー』 H III 181) .

216 われわれはデカルトの普遍的懐疑の試みに代えて、われわれが明確に規定した新しい意味での普遍的な判断中止を行うことが出来るであろう。[ただし無制限に判断中止をすれば何も出来なくなるので] 一定の制限を加える。—中略—われわれの意図は、まさに括弧入れの方法、ただし一定の制限を加えられた括弧入れの方法によって獲得されるべき。[現象学という] 新しい学問領域を発見することにあるのである。

その制限とは簡単に言えば次のようなものである。すなわち、自然的見方の本質に属する普遍的措定 (Generalthesis) を作用させず、普遍的措定によってその存在が指定されているものすべてを一挙に括弧に入れるということである。従ってわれわれが括弧に入れるのは、つねに《われわれにとって現にそこに存在》しているこの自然的世界の全体であるが、しかしたとえわれわれが勝手に括弧に入れたとしても、この自然世界は依然として意識に現れる現実として存在し続けるであろう (『イデー』 H III 67) .

219 客観的世界に対して現象学的な判断中止を行なうこと、あるいはそれを括弧に入れること—はわれわれを無に直面させるのではない。むしろこの方法的操作によってわれわれが獲得するのは、もっと明確に言えば、省察する者としての私がそれによって獲得するのは、私自身の純粋な生であり、その生に属するすべての純粋体験と純粋に思念されているものすべてである (『省察』 H I 60) .

222 普遍的な自己省察によって世界を再び獲得するために、われわれはまず一度、判断中止によって世界を失わねばならない。アウグスティヌスはこう語っている。「外へ出て行こうとせず、汝自身のうちへ帰れ。真理は人の心に宿る」と (『省察』 H I 183)⁹ .

現象学的還元とは、いっさいの超越者 (私に内在的に与えられていないもの) に無効 (Nullität) の符号をつけることである。すなわちその超越者の実在と妥当性をそのまま措定しないで、せいぜい妥当現象として措定することである。たとえばいっさいの心理学や自然科学等、あらゆる科学を私はただ現象として利用しうるにすぎず、従ってそれらを、わたしにとって、[認識批判学] の手がかりになりうる妥当的真理の体系としては、また前提としても、仮説としてさえも、利用してはならない (『理念』 H II 6) .

IV. 現象学的哲学の展開

234 彼の現象学が単に静態的な記述的現象学から、超越論的現象学へ、換言すれば動態的な、いわゆる発生的現象学へ進展したのに伴い、志向性の概念も当然、機能的な意味をもつようになる。つまり〈何かについての意識〉という場合の〈について〉が、超越論的意識の独特な機能的関係 (すなわち志向的对象を構成する能作を暗示する関係) として捉え直されることになる。

235 自我の能動的能作としての知覚が機能するためには、いわばその前提として、知覚の志向的

⁹ *Meditations cartésiennes, Introduction à la phénoménologie*, (1929 ソルボンヌ講演原稿に基づく)

対象となるべき何かが、あらかじめ受動的に与えられているのではないかということが問題になる。

客観主義が、人間とそれを取り巻く事物世界との間の根源的な志向的相関関係を捨象して、あたかも後者がわれわれと無関係に独自に存在しているかのように看做すのに対して、志向性の現象学は自我と対象的世界の根源的関係を開示するばかりではなく、さらに進んであらゆる対象的存在者にその存在の意味と妥当性を付与する認識の主体、行為の主体としての自覚をすべての自我に覚醒させるのである。

1. 意識の志向性

241 自我のない意識が考えられないのと同様、その対象となる何ものが、すなわち意識の中で意識されている何らかの《対象性》を抜きにしても、意識というものは考えられない(『第一哲学』H VII 106)。

246 あらゆる能動的構成はその最低段階として(対象を)あらかじめ与える受動性を必然的に前提としている。従って能動的構成を追究してゆけば、われわれは受動的発生による構成に逢着する。われわれの生活の中で、いわば既成のものとして、そこにある単なる事物(たとえばそのものをハンマーであるとか、机とか、装飾品などとしてわれわれに認知させる精神的な諸性格をすべて度外視された事物)として、われわれに現れてくるものは、《そのもの自身》という根源性において、受動的経験の総合によって与えられるのである(『省察』H I 112)。

2. 対象の在り方

267 世界が持つ不特定な一般的意味も、そしてまた種々の個体にもとづいてその都度規定される世界の意味も、要するに世界がわれわれに対してもつすべての意味は、知覚し、表象し、思考し、評価する、われわれ自身の内面において登場し、主観的な発生の中で形成される意味である。すべての存在の妥当性はわれわれ自身の中で実現された妥当性であり、それらの妥当性を基礎づける経験と理論の明証性は、われわれ自身のうちに生きており、われわれを習慣的に(次の新しい経験へ)動機づけている。—中略—このような世界が意識に対して本質的に相対的である以上、それ自体として存在する世界一般ということの意味は不可解である。どのイデア的《世界》もたとえば独自の仕方でも《それ自体として》存在する数の世界も、それと同様の超越論的疑問に属する不可解さを呈示している(『百科草稿』H IX 271)。

269 どの志向的体験も、知覚と同様、それぞれの《志向的客観》を、すなわち対象の意味をもっている—そしてまさにこのことが志向性の根幹をなしているのである。換言すれば、意味をもっているということ、ないしは何かを《意味においてもっている(im Sinne)》ということが、あらゆる意識の基本的性格であり、だからこそ意識は一般に単なる体験ではなく、意味をもつ体験、すなわち《ノエシ的》体験なのである(『イデー』H III 223)。

278 《客観的世界》という存在の意味は、私の原初的世界(私の自我がいわば独我論的な立場で最初に構成する世界)を基盤にして、幾つかの段階をへて構成されたものである。その第一段階としては、他我(Andere)もしくは他我一般、すなわち私自身の具体的存在(原初的自我としての私)から排除された(他者の)自我を構成する層が別出されねばならない。そしてこの層が明示されると同時に、それが動機になって、私の原初的世界の上に〈普遍的な意味〉

の上層が構築され、そしてこの上層に媒介されて私の原初的世界は、ある一定の客観世界、すなわち私自身も含めて万人にとって同一の世界の現出となるのである(『省察』H I 137)。

3. 自我の諸概念

281 考えられる限りのあらゆるものに先立ってまず第一に存在しているのが私である。この《われ在り》こそ、かく言う私、しかもその意味を正しく理解してかく言う私にとっては、私の世界にとっての志向的な根源的根拠である。しかも私はそれと同時に、《客観的》世界、すなわち《われわれすべてにとっての世界》もまた、このような意味で私にとって妥当している世界として《私の》世界であることも見落としてはならない(『論理学』FTL 209f)。

283 《われ在り》という命題こそ、あらゆる原理のうちの真の原理であり、あらゆる真の哲学の第一命題でなければならない(『第一哲学』H VIII 41f)。

284 純粹主観へ、ego cogitoへ立ち帰るということは、〈何かを問題にして疑ってみる場合に既にその根底に前提されている、それ自身は究極的に疑いようのない、究極的に確実なるもの〉を省察するということである(『第一哲学』H VIII 166)。

287 人間としての私のリアルな存在をも含めた、あらゆる実在者を含む世界は、構成されたもろもろの超越的存在者の統合体(Universe)である。すなわちそれらは私の自我の諸体験と諸能力によって(次いでこれらに媒介されて、私のにとって存在する相互主観性の諸体験と諸能力によって)構成されるのであるから、私の自我は究極的に構成する主観性として、この構成された世界に先行している。世界の超越性はこの自我に対して相対的な超越性であり、そしてまたこの自我に媒介されて、この自我に属する開かれた自我の共同体にたいしても相対的である(『論理学』FTL 222)。

290 自我としての私は、自己移入の作用によって、一種の知覚に似た仕方で他の主観すなわち他者の《有体的》現存在を意識する。つまり《他者の身体》と呼ばれる特定の所持物を手掛かりにして、それらに属し、それらと共存する心的生活を自己移入的に理解するのである。—中略—つまり私は他者の心的状態そのものを見ることができず、決して本来の意味でそれを知覚できないのではあるが、しかし身体を見ることによって、つぎつぎに表現される他者の心的状態を察知するのである(『第一哲学』H VIII 134)。

293 本来第一の存在、すなわち世界のあらゆる客観性に先行して、それを支えている存在は、超越論的相互主観性であり、あい集まってさまざまな形式の共同体を形成する無数のモナドの全体である(『省察』H I 182)。

編者解説

310 中期以降の思索で特に重要なテーマとなった生活世界論—本書に収録できなかった〈生活世界の仕組みと、そこでの人間の在り方〉についてのフッサールの考え方と、彼が理想とする人間の生き方を述べることにします。

313 物理的な自然論も、物理的存在と認識主観との相関関係の問題を考察することによって、単なる実証科学から哲学的に進化された物理学へ変容するのだ、とフッサールはする。